

2025 年度サマープログラム 体験記

名古屋大学医学部3年 松崎ゆら

私は、2025 年度サマープログラムに1週間ほど参加させていただいた。そこでは、アメリカや中国から来日した医学生と毎日刺激的な日々を送った。このプログラムには、お互いの国の観点から医療（特に地域医療）について見つめて意見交換するだけでなく、鵜飼や宿泊体験を通して深い絆を築く機会がたくさん用意されており、人として成長することができた。このような得難く興味深い機会を準備してくださった教授、先生方、国際連携室の皆様、かがやきクリニックのみなさまには感謝の気持ちでいっぱいだ。

このプログラムでは漢方の講義、小児科の授業（アメリカ、日本それぞれの小児科）、地域医療（かがやきクリニックにおいて）の講義があり、それぞれの講義でディスカッションや意見交換の時間が設けられていた。アメリカの学生も中国の学生も非常に広く、かつ深い視点を持っており、同年代の学生として私も負けてられないぞという気持ちが芽生えた。やはり、国によって制度や考え方が異なるようで、どの制度や考え方が正しい、間違っている、というわけではないからこそ、お互いに深く考え、議論が弾みきっかけになった。私も日本の医療制度を深く学びなおすきっかけになったと同時に、その長所や短所が明らかになり、「この国のこの点を日本に取り入れていけば」と考えることができるようになり、国際的な視点から見つめる姿勢が身についた。また、自分の考えを他の学生と共有したときに様々な意見や質問を受けて、より深い意見にしていく時間が、私には非常に魅力的で楽しいと感じた。学生がそれぞれの全く異なるバックグラウンドを持っているからこそその時間であり、これはこのプログラムに参加する醍醐味だと感じた。特に、小児科についての授業では、実際にロールプレイをして理解を深めたことが印象的だった。各国での反応も異なり、その文化背景を聞くことも興味深かった。

また、講義だけでなく、かがやきクリニックでの在宅医療見学も有意義な時間だった。在宅医療は、ほかの国の学生にとって新鮮な医療形態のようで、在宅医療の見学後の学生たちがきらきらした目で「このスタイルの医療は興味深い、ここがすごかったし、こんなこともしているなんて驚いた」と話していたことが忘れられない。この仕組みを自分たちの国に持って帰って活用するにはどのような制度改革が必要か、どのような医師が必要か、を議論することも非常に有意義な時間だった。

かがやきクリニックではさらに宿泊体験、鵜飼、浴衣体験を行ったが、これも他の学生との絆を深めることができる非常に心躍った時間だった。鵜飼は日本人の私も初めての経験でわくわくしたし、日本の伝統的な文化である鵜飼の初体験を海外から来た学生とできたことはかけがえのない時間になった。さらに、宿泊体験や浴衣体験、夕食時のパーティー（寿司握り体験やバーベキューもしました！）などを通して、他の学生と同年代の友達として楽しむことができ、その後帰宅したときに少し寂しさを感じたほどだった。どの学生も思い切り楽しんでおり、彼らの積極性と思いやり溢れる人柄によりたくさんの暖かい時間をとも

に過ごすことでかけがえのない友情を育むことができた。医療についてだけでなく、たわいもない会話をたくさんすることで、信頼が深まり、そのおかげで、講義中の議論もより活発な議論をすることができたように思う。このような素敵な機会を用意してくださったかがやきクリニックのみなさまに感謝の気持ちでいっぱい。

絆が深まり、休日に数人で遊びに行くこともあった。私もその夕食に参加したがみんなプログラムのときの引き締まった顔ではなく、ただ友人としての笑顔と会話で溢れていて、非常に暖かい空間だった。

今回のプログラムでは、他の国の医療について深く学び意見交換することができただけでなく、友人として深い絆を築くことができ、かけがえのない時間を過ごすことができた。本プログラムでともに過ごした学生と将来医師として胸を張って会えるように日々精進していきたい。

